
ある魔王の独白

D E G

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある魔王の独白

【Nコード】

N4779H

【作者名】

DEG

【あらすじ】

これはある人間の人生録である。彼の口から語られた世界の先には何があるのか……

序説（前書き）

私には衝動があります。ある作品が、唐突に私の中に生まれた時、その瞬間、私はその物語を書かなければならないという呪いのような衝動に駆られるのです。必然性があるかのごとく、まるで作品自身が生かされることを私に叫んでいるように。これはそうして出来上がったものです。ただ、それだけなのです。

序説

人間とはなにゆえに心を持ったのか。全てを破壊できる力ですら、絶対的に敵うことのないものがそこにある理由はなんだったのか。彼らはいつそれを思い出すのだろうか。

なにもかも謎に包まれたままであり、これを言葉によって証明するような力は存在するまい。どんなに強力な言葉も所詮、一定量を示しているに過ぎないのだ。

ともあれ、彼らは私に勝った。この私すらやはり人間に違いなかったことを知らしめた彼らには、敬礼の念を払うことも決して無意味ではない。

一部（前書き）

本作には一部、非常に残酷な描写があります。現実にあつたようなことですが、気分を害される方は読むのをお控え下さい。また、読まれる場合はどうか途中で頁を閉じず、最後まで読了願います。

一部

それは生れついて持った運命だったのか。この世に生を受けた時、その瞬間から私は、誰も敵わぬ神のごとき魔力を備えていたのだ。

親がまず私の力に気付いた。まさしく世界に終焉をもたらすであろう私の存在は、親にとってすら脅威であった。私の産みの親達は、私を産んで二年と待たずに私を殺そうとした。

この時、私は初めの（生まれ出た以後の）自由を得た。無比なる最悪の魔力を持っていた私は、言葉も話せぬ子供ながら親を一瞬で消し去った。人間とはほとんど変わらぬ体からあまりにも理不尽な力をふるえる自身に驚愕しつつ、私は力を使うことを知った。

次に私は、貧窮の呪縛から解放された。

というのも、金も食べ物も私の魔力によって容易に他者から奪うことが出来たからである。

そうしていくうちに、肉体が必要とする以上の欲望が芽生えた。男の体を持って生まれた私にも当然、肉欲が備わっていた。“女”を手に入れることにも何等手間を取らなかつた。また美味しい食べ物の味を知っては、他人にそれを作らせた。私を畏れる人間が私にひざまずくのを見るのが、妙に心地良かった。

私はこの世で手に入るあらゆるものを手に入れた。力によって人を操ることを知った私は、人間さえ思うままに消費した。たまに、私に全てを奪われた人間達が私を倒すためにやってきた。彼等はしばしば途方もない大群となつて襲い掛かってきたが、それすら一人の力で全て消し去ることが出来た。

そのうち、私以外の人間達は皆、愚直なまでに私に従うようになった。気付いた頃には私は全人類の王となっていた。まだ私に逆らおうという意志を持つ者は数えるほどになり、むしろそうした人間を、以前まで私を憎んでいた人間達が排除しようとした。私を殺そうとする人間を、他の人間がすすんで殺すようになっていった。

私はまた長寿であった。不死身ではなかったし、人間と同じように摂取しなければ生きてはいけなかったが、百年の月日が経っても私の体はほとんど衰えなかった。まるで途中で成長が停まったかのように若い肉体を保っていた。

全てが可能だった。欲しいと思えばなにもかもが手に入った。“生物”に成り下がった人間を動物と戦わせたり、地獄絵図のような殺し合いを作為して見ることも出来た。だが私自身が死を望むことは決してなかった。もとより、死を恐れることは私と全く無縁のようには思えた。ただ私が手に入れるものが、全てであった。

一部

ある時私は、女共を大量に集めて自ら孕ませるということをした。そして孕んだ子が産まれそうになると、母親の前でその赤子を自ら殺すという遊びをした。理由など何もなく、単にその母親の女が気絶したり抜け殻となったり、泣き叫び怒り狂う様子を見るのが楽しみだったのだ。

その時、大抵の女は私をあらん限りの憎悪で殺そうとした。しかし私の横には他の人間の従者が数人控えており、私に手を伸ばす母親達を彼らが武器で殺した。その不思議に滑稽な様子を見るのも一興となっていた。

ある若い女が子を孕んだ。

その母親は、まだ出産するには足りないほど若い幼い体のようにだった。だが私はもはやそうしたことを特別に意識する感覚は持ち合わせていなくなった。いつものように私は孕んだ子を産ませるため、従者に出産の手伝いをさせた。長い間それを繰り返してきた彼らの感覚も私と同じく、人間としての正常な働きはしていなかった。

彼女は自分の子が最も残酷に殺されることを知っていた。私は教えて彼らにそれを事前に教えることがあった。単に、その方が楽しいような気がしたからである。

私はその若い母親には少し興味があつた。

なぜなら私が子供を殺すことを伝えた時、彼女は人形のようにただ私の眼を見つめただけだったからである。他の女は、泣くか逃げるか、懇願してくるかのだれかの反応をして、私の支配欲を満たして

くれた。この非常に若い女だけは不可解であり、私はほぼ生まれて初めてどこか不快であった。子を殺した後でどうするかと楽しみだった。

若い母親は出産の時、他の成熟していた女に比べて苦しそうにした。涙を流して歯を食いしばり、必死に痛みを悶えていた。ここで私はまだ何も感じることはなかった。いつも通りの手順を眺めているに過ぎなかった。

突然、若い女は再び私の眼を見た。その目はまれに他の母親がするような、私に何かを懇願する涙目だった。

それと同じはずだった。はずだったのだが、若い女は同時に息荒くしゃべった。

「た、すけてっ……」

その言葉は、今まで聞いたことのない響きに感じられた。私は命乞いの言葉は生まれてから数え切れないほど聞いてきた。しかしそのどこにも、この若い女のような声は思い当たらなかった。真つすぐに私を見ながら、雨粒が自然とあたるように私の中に入ってきた。

かといって、私はその時すぐに憐憫や同情に駆られはしなかった。もとより、そんな感情を百年間もおすこともなかったのだから。

「っひっい……たすけてっ……」

若い母親は再び喘いだ。ひたすら泣きながら私に声をかけてきた。

私はその時になって、ようやく明らかかな不快を感じた。

魔なる王として生まれてから、初めてその胸苦しさを覚えた。私は珍しく興を削がれ、従者達にさっさと出産を終わらすよう命じた。いつもならば、私は胎児が出て来た瞬間にその頭を潰すことで赤子を殺していた。しかし今度は、この母親の目の前で赤子を殺してやるうと思つた。この時もしやすると、私はまた生まれて初めて純粹に怒っていたのかもしれない。

若い女は最後に断末魔のような金切り声をあげ、ついに赤子を産んだ。私は従者を下からせ、産声をあげる生まれたばかりの赤子を乱暴に掴んで見せた。そして激しい痛みにも力尽きたばかりの小さな母親の眼前にそれを突きつけ、彼女の虚ろな目にそれをしっかりと確かめさせた。

「さあ、よく見ておけ！！」

私はうすら笑いながら健康に泣きわめく赤子の体を持ち、魔力によつて生まれたての人間をあっという間に破壊した。そして、この若い母親がどう反応するか、試すような気持ちで見ている。

しばらくの間、若い女は力無く息をしているだけであつた。何の拳動もない人形のような若い女に私はまた腹を立て、もう一度赤子を殺した跡を見せつけた。

すると、若い女の目に何かが溜まり始めた。疲れ果てた無表情なままの顔に、それは伝い流れ落ちた。驚くほど自然に彼女は泣いていた。他の人間達と違い、それはどこまでも純粹な“泣く”行為に見えた。

全く言葉に出来ないほど、私はそれに見入ってしまった。どうすればいいのかわからずにいる。自身をいつも後押しする、力の叫び

声すら聞こえなかった。わけがわからずに、途方にくれたように若い女を眺めていた。

そのうち若い女が、とても弱々しく私の手を掴んだ。そしてとてもゆっくりと、私を支えにして体を起こしていった。彼女はまだ泣いていた。私は呆然とされるままになっていた。

その時、ズブリと音がした。若い女が掴んでいた私の手にもその衝撃が伝わった。彼女の腹を、従者達の持った二本の刃が貫通していた。彼女の肩はぶるぶると震え出し、コポツ、と溢れてきた血を吐いた。なぜか私はその肩を無意識に持っていた。

母親だった若い女は、私の眼を見上げた。見上げて私の中に入ってくるように、静かに見つめた。

悲しんでいるようで、救いを求めてもいた。哀れんでいるようで泣いていた。怒っているように笑っており、叫ぶようで諦めているような、そうしたものを、まるで全部私に伝え残すような顔をしていた。

彼女は赤子を潰した私の手に血と涙をこすりつけるように俯せた。そうしてそのまま、冷たくなって動かなくなった。私はその間しばらく、彼女が死んだことを確信しなかった。普段なら即刻焼き払わせる遺体を、自分の場所へと持ち帰った。

不快感は消えていた。代わりに何もなくなったような、その空虚が新しく私の内に出現した。

三部

悩むことなど、私の人生においてはこれが初めてであった。あの若い母親が私に何かを残したような、その言い得ぬ感覚が、あれから呪いのように纏わりつき始めた。

百余年の月日を生き、ようやく私は自分の中に新しいものを見つけ出したような気がしていた。

私は今まで、所謂『負』の感情というものを経験したことがなかった。

怒りや憎しみ、恐怖心といった類の感情はむしろ私が創り出すものだった。

だがあの一件の時、私は何かに抗うような怒りを知った。そしてそれが不快であることを知った。またその後しばらくの間、どんな酔狂な儀式を試しても一向に興味が湧かなかつた。何の意味もなく苛立つこともあつた。そんなことはこの長い年月において一度もなかったにも関わらずである。親を殺した時でさえ、私は気分の高揚を覚えたというのに。

とにかく原因不明の、半ば無気力な状態が私の中に生まれた。私の周りにいた人間達がそれに気付き、私の力を疑うことがあつた。私はその人間を、以前のように片端から殺していった。

しかしそこでも私は、私の内に、自覚しない自己がいることに気付かされた。殺しが楽しくなくなつたのである。そればかりか、あの若い女が死んだ時より眠っていた嫌な空虚が、人を殺せば殺すほどに拡がっていく気がした。私は当惑した。この時初めて、本気で頭を抱えた。

破壊によつても頭の靄が晴れない時、私はしばしば自分の場所に戻つてあの若い女の死体を見ていた。私は彼女の死体に、他の人間達によつて防腐の処置を施させていた。なぜそんなことをしたのかもわからなかつた。ただ彼女の穴の空いた体は、それ以外全く変わることもなく、息絶えたときの静かな寝顔のような表情を保っていた。彼女はやはりまだ子供の体であつた。

死体など、語らないただの有機物である。

それどころか私は生きた人間すら糟と同様にしか考えていなかったというのに、彼女の死体を見ると必ず、あの時の映像が脳内でじわりと蒸し返るように鮮明に焼きついた。

私に、どこまでも不可解な虚しさを残したあの表情だ。それを想像すると何も考えられなくなる。私はまるで、私がそこから消えていたような感覚をあとから覚えるのだった。そしてそういう感慨に耽つたあと、私はすべきことを失つたように意味のない破壊を繰り返していた。それから手に入れるものは、もう何も無くなっていた。

四部

百年の間にあらゆるものを蹂躪し、あらゆるものを破壊し、あらゆるものを意のままにした。すでにこの世に納まるものは全て私の手の中にあつた。今や何一つの不足がなくなつた。

それなのに、例の空虚は消えなかつた。

むしろ年月を増すことにこのどうしようもない激情は深くなつていった。私はいまや純粹に力を行使しながら生きること止め始めていた。私の生まれ持った無双の魔力は、私の空虚を埋める力にはなり得なかつたのだ。不思議な感じだつた。“悟る”ということを感じたような、諦めにしては落ち着いた気分だつた。

私はいつしか人間達と関わることをやめ、自分の場所に閉じこもるようになった。そしてあの幼い姿の死体を、長い間じつと眺め続けていた。

一体、何が起きたというのだろうか。

まるでこの小さな娘の最期の意志が私の中の奥底まで入り込んで、今なお生き続けているようであつた。殺した人間は、ただ消える。そうではなかつたのか。私は摂取もせず、死体となつた若い女の記憶にとり憑かれたように、ずうつとその顔と向かい合つていた。そうして過ごした時間は、神に匹敵した支配者を失つた人間の世が再び荒れ始めるには充分なほど、馬鹿げた長さだつた。

気付かぬうちに私の体は段々と痩せていき、数百万の人間をなぎ払つていた魔力は少しずつ失われていった。さらに、老いが体を蝕み始めた。黒く輝いていた私の髪は、知らぬ間に真っ白になつてい

た。

それほど長い年月をかけねばならなかった。そうしなければ私にはわからないほど、私は途方もない時間を、何もかも思い通りに生きてきたのだ。何一つ“失った”という経験をするともなく。

「……………」

これが“悲しい”という想いだと、本能的にわかったのは、幼い母親の穏やかな臉に涙が零れた時だった。

“泣いた”ということを実感するのにもさほど時間は要らなかった。

私は彼女が死に際に伝えたものを今になって受け入れ、感じ、彼女がいなくなってしまったことをひどく寂しく思った。そして情けなく、心身の淵から痛々しくなった。痛くてとても悲しくなって私は泣いていた。どうして殺してしまったのだろうかと今更悔やみ、果ては彼女の魂がここに戻ってきて欲しいとさえ願った。もう一度私の眼を見てほしいと。

私は無力感に満たされた。こんなことは今までありえなかった。何十億の命を壊せる力が、何故たかが一つの命をどうにかできないのか。そう考えるといたたまれず、私は自分を憎んだ。初めて我が身に授かった力を呪った。この力が一体何の役に立つというのか。

私が他の人間と何が違ったのか。否、最初から私はただの人間であつた。そう実に、脆い生き物だったのだ。この哀れな少女のように。何一つ変わるところはなかった。

終幕

長い年月はようやく、急激な老衰となって私の体に現れだした。私の肉体はもはや霸王の貫禄を微塵も残してはいなかった。私はそれを嘆くわけでもなく、ぼんやりとした状態のまま再び人間達の世界に戻った。しかし、そこは既に絶対的指導者のいない混沌の世界と成り果てていた。

その時の私にはもう、破滅をもたらす圧倒的な力は失われていた。自らの所業の結末を理解すると、やはり私は茫然とするしかなかった。これまでの生がまるでなかったことのように感じた。

私が姿を現した時、人間達は直ぐさま私の老いを察知したのだった。徒党を組んでいた彼らは、恐れなど掻き消えたかのように私に襲い掛かってきた。私は反射的に力を奮った。だが朽ちかけた体から放たれる魔力は、数えるほどの人間を退かせる程度でしかなかった。私は魔王でもなんでもなくなっていた。私は彼らの怒りが恐ろしくなり、必死になって人間達から逃げた。助けなど全く存在しなかった。

私はまた自分の場所へ逃げ帰ってきた。その場所はかつて人間達が私を畏れ、誰ひとり踏み入らないところであった。しかし今、その場所にも私を憎む人間達が迫っている。

その時私が考えていたことは、自分の身を守ろうとすることではなく、死の恐怖感を味わっていたのでもなかった。むしろ自分のことは全く考えず、ただこの場所にあるあの綺麗な死

体を、どうかそのままの姿で葬っておきたいと、ひたすらそんなことに心奪われていたのである。そこで私は安置してあった幼い肉体を抱き上げ、外の地面に静かに埋めてやろうと思った。今では彼女の入る穴を作ることすらかなりの苦勞であった。

真つすぐな罪悪感と呼べるものはまだ私にはなかった。

数にならぬほどの人間を殺し、言葉にならぬほどの悪業をこなしてきた。

しかしそこにあつたのは、いたく純粹な衝動、いわば本能に似た好奇心であつた。まさしく子供心のままに私は愉しく力を奮い、興味のゆくところへ素直に試したに過ぎなかつたのだ。だがはつきりとした感情が芽生え始めた今、振り返つた過去のなんとも勿体ないような感覚をぬぐうことが私には出来なかつた。

全く、私は生まれたての子供と同じように、あまりにも無知であつた。無知がゆえに不幸をもたらし、私自身も不幸となつた。なんと情けないことであろう。百と十数年もの時間を生きてようやく真の人間というものがわかり始めたのだから。一体、私の生き様は何のためにあつたのか。

あの母親を葬る時、そこで私は別れの虚しさを味わつた。そして、まもなく私も彼女と同じところへ行くのだろうか、初めて自分の死を想像した。意外にもそれはたやすく思えた。これほど悩まされたというのに、人の死とは今まで私が考えてきたのと同じく、風が吹くようにほんの一瞬の出来事に過ぎない気がした。

土に隠れていく彼女の顔をいまだ惜しく思いながらも、私は若い女の死体を大地に還した。あの折に見た彼女の表情は、いまなお目の前に焼きついて離れずにいる。まるで私の一部となつたように。それは、なんとも奇妙であり、落ち着いた感じであつた。

その時、私が横を振り返ると、いつのまにか人間がいた。恐れを知らぬ目をした、若い少年である。

「……私に用か」

と、私は静かに彼に問い掛けてみた。だが少年は反応せず黙ったまま私の姿をじろじろ見ていた。その目はひどく淀んでおり、生氣を失っているように見えた。おそらく私を殺しに来たのだろうと推察した。

そしてやはり、少年はいきなり短剣を手に持った。私はぼんやりその一連の流れを目にしていた。

「……お前は悪いやつなんだ！」

少年が唐突に叫んでも、私は何等の動揺も覚えなかった。不自然なほど心が穏やかであった。悪いとはどういう意味かと、私は彼に聞き返した。

「お前がいつぱい人を殺したんだ！ 死んじゃえ！」

私は、それならば人間は皆、生まれながら悪なのかと考えた。私だけが憎まれる道理があるだろうか、と。

だが少年はさらに私を睨みつけた。私怨や制裁などという意図は寸分もない、ただ私を殺さねばならないと信じ切っている、まっすぐな瞳であった。

少年は短剣を突き出しながら私に向かって駆けてきた。大勢の人

間に追われていた時と違い、私は少しも逃げようとしなかった。まるで彼を受け入れるかのように待っていた。

ズブリ、という音はどこか懐かしい心地がした。それは私が思っていたよりもずっと痛かった。私は思い出したように申し訳ない気持ちになり、

「ゴホツ」と体内の血を吐き出した。

短剣が、私の腹に見覚えのある傷を形作った。どす黒い穴は、たつたいま私が葬った人間にあつたものと同じ場所に貫かれていた。

それは不思議なことであると言えよう。私の胸中は、あの時の母親の心情と全く同じであつた。そう確信できた。

突き刺した短剣を握りしめ、私の様子をうかがう少年の肩にとても弱々しく手を置く。少しずつ痛みが強くなり、しかし次第に薄れていく。

「……すまなかつた」

少年は呆気にとられたように私の眼を見た。

私は嬉しくもあり、情けなくもあつた。虚しさと希望を同時に感じていた。声をあげて泣き出したいような、消えてなくなってしまうような、そんな気持ちの中に、愛おしみを込めていた。それをまるで、私を殺したこの人間にひたすら与えて受け取ってもらいたかつた。

そのうち、私の視界はぼんやりと霧がかかったようになっていった。最後に私が感覚したのは、自分がなぜか穏やかな表情をしてい

ることと、私が少年の中へと入っていくような心地良い錯覚であった。

幸福な気がした。私を縛り付けるように私の中にいたあの女がすぐ近くに、まるで私が彼女と同じ存在になったような、わけのわからぬ途方もない充実感があった。

どさりと倒れた音も聞かぬまま、私の意識は絶えた。世界の空は陰りを見せず、真っ白に明るかった。

追憶

小さな村の広場で、子供の群れが遊んでいる。暖かい日差しの下、その穏やかな場所の一角に一人の小さな男の子がいた。

彼は元気に戯れる子供達とはなれたところの木陰で、手に包んだ何かをじっと見下ろしていた。

「なにしてるの？」

ふと近づいてきた声に小さな少年が顔をあげる。そこには彼と同じくらいの、ほんの小さな女の子が立っていた。

「……死んじゃった」

再び手元に目を落とした少年に、
「何が？」と少女は問い掛ける。少年は少し迷いながらその手の中を少女に見せた。

「これ、鳥？」

「うん。だいぶ前に死んじゃったんだ……あんまり懐いてなかったけど」

そこには目を閉じた小鳥が静かに横たわっていた。少年はそれを撫でたりもせず、じっと眺めていた。

少女が彼に声をかける。

「お墓、つくってあげないの？」

「うん……」

しかし少年は、決め兼ねるように悩んでいた。少女がもう一度言った。

「埋めてあげよ。きつとよく眠ってくれよ」

「……そうかな」

「うん！」

少年は頷いた。そして二人で、木陰の地面に小さな穴を掘った。少年が大切に抱えていた小鳥はその中へゆっくり納まり、土に埋まっていた。

「さびしい？」

「……うん。もうさびしくない」

少年が少女の方を向くと、彼女は春風のように柔らかく笑って見せた。少年もつられて微笑んだ。

「あのね」

「え？」

少女が少年の手を取る。

「ずーっと前に悪い王様がいたっていう場所があるの。でもそこが、今はすごく綺麗なお花畑になってるんだって」

「そうなんだ……」

「一緒に行ってみない？ その王様のお墓もあるんだって！」

少年はまた迷ったように俯いた。しかし、少女が手を握りながら「ねっ？」と彼の眼を見つめると、少年は思わず頷いた。

「うんっ。行ってみる」

「よかった！ 実は一人で行くの、ちょっとこわくって」

二人は一緒に立ち上がり、小鳥のいる木陰の地面を見下ろした。

「おやすみ、鳥さん」

「……さよなら」

二人は顔を見合わせた。そしてもう一度手を繋いで、安らいだ表情で歩き出した。

あたたかいとても穏やかな風が木陰に吹く。空は澄んだ色をして、何もかもがその中に溶け込んでいるようだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4779h/>

ある魔王の独白

2010年10月14日12時37分発行